

『莊園制と武家社会』	安田 元久
地頭の「対榎」と「抑留」	飯田 久雄
平氏と九州	
延暦寺衆徒と佐々木氏——鎌倉時代	黒田 俊雄
政治史の断章——	
鎌倉幕府の鎮西統治に対する抵抗と挫折	瀬野精一郎
若狭国における莊園制の形成	網野 善彦
東寺領若狭国太良荘の均等名について	渡辺 澄夫
莊園領主経済の諸段階	佐々木銀弥
鎌倉時代における伊予国の地頭御家人について	田中 稔
薩摩国伊集院の在地領主と地頭	五味 克夫
九州諸国における北条氏所領の研究	石井 進
九州莊園年貢の輸送について	新城 常三
永仁徳政と越訴	笠松 宏至
鎌倉末期周防国衙領支配の動向と大内氏	松岡 久人
豊前国宇佐宮の境内十郷	中野 幡能
遠江・駿河守護今川範国事蹟稿	川添 昭二
茂木氏給人帳考	永原 慶二
豊臣時代の武家社会と文化	河合 正治

〔法令国家と貴族社会〕A5判六二八頁・『莊園制と武家社会』A5判六一二頁 共に昭和四四年六月 吉川弘文館刊 定価各三、五〇〇円 (熱田 公)

M・ベンジク／S・ホ  
イヤー共著 瀬原義生訳

### ドイツ農民戦争

西ドイツでは第二次大戦後宗教改革史関係の研究書は無教といつてよい程現れているが、農民戦争の研究は皆無に近い。それに対して東ドイツでは農民戦争は研究の最も活潑な分野の一つをなしているが、この対照は東西両ドイツの研究関心の相違をあげやかに示しているといえよう。マルクス主義を基本とする東ドイツの歴史学界では、宗教改革も政治的社会的革命運動の一環としてとらえられ、したがって宗教改革そのものよりも農民戦争が重要視される結果となつていのである。一九六五年に刊行された本書の原書は、東ドイツにおけるそのような農民戦争研究の最新の成果の一つである。

しかし本書はいわゆる研究書ではなく、

農民戦争の経過を詳細に叙述した概説書である。とはいへ、わが国ではこの種の書物はエンゲルスの「ドイツ農民戦争」以外にはなく、書かれて以後一世紀以上たつては、唯物史観の古典という意義を持ちつつづけているとはいっても、事実関係ではその後の研究で訂正さるべき箇所を少なからず含んでいるので、最新の研究成果に立つ本書の訳訳は、農民戦争に関心をもつ者にとって大いに役立つであろう。本書の特色の一つは、いうまでもなくマルクス主義の立場から書かれていることであるが、戦後東ドイツやソヴィエトの歴史家の間で用いられた「初期市民革命」という概念で農民戦争をとらえ、また階級関係の観点では、一揆軍の中に穏健派と急進派が存在したことを明らかにすべく努力しているところに、その新しい傾向が表れている。エンゲルスによつては農民戦争は「最初の市民革命」とされ、また一揆軍は平板に平民的反対派とされてきたが、これは基本的にはエンゲルスの見解を継承しつつ、その修正を意味している。本書の特色の第二は、軍事史シリーズの一冊として出されているところから、農民戦争の軍事的側面に力点をおい

ていることであり、領主軍や一揆軍の編成、裝備、戦闘法、兵力、戦況などが比較的詳しく書かれている。

しかしこの特色にも問題がないわけではない。なかでも「初期市民革命」という概念の使用については抵抗を覚える読者も少なくないであろう。概説書である本書の性格からして、それについての詳しい論証がないのは致し方がないとしても、訳者が巻末に付している学説史的解説を読んでも、疑問は解消しない。また一揆軍の敗北の理由を穩健派指導者の裏切りに多くを負わせている叙述も、平板に過ぎる印象を免れない。訳文は、一、二不適切な箇所も見出されはするが、全体としてよくこなされ、読みやすい。

(B6版三一六頁 昭和四四年三月  
未來社刊 定価九〇〇円)

(中村賢二郎)

小牧実繁先生古稀記念  
事業委員会編

## 人文地理学の諸問題

本書は副題にもある通り、昭和十三年から七年余り京都帝国大学文学部地理学教室

の主任教授を務められ、戦後は滋賀大学教授及び学長として数多くの研究と後進の指導に尽された小牧実繁博士の古稀を記念して、その門下生によって執筆・刊行されたものである。

収録された論文は四十の多きにのぼるため、その一々について詳しい内容を紹介することは出来ないが、分野別に執筆者と内容を簡単に概観してみたい。

まず、地理学史・方法論では、村上次男氏がコスモグラフィアの系譜とその地理学への結実について、野間三郎氏が地理学における形態学的方法と生態学的方法の展開について、別技篤彦氏が『ジャワ誌』の著者ラップルズがジャワ副総督時代に行ったジャワ研究について、室賀信夫氏が日本の古代伝承中の神々の遍歴記事に見られる地理的記載について、辻田右左男氏が近世国学者に見られる優れた地理学的識見と地理思想について、河地貫一氏が離島研究における文化・経済の発展過程決定者としての人間社会の重要性の認識について、中田榮一氏が地域建設への地理学の応用方法について、それぞれ執筆した論文がある。

地図学史に関しては、日本のものでは、

海底地形図作製史についての川上喜代四氏の論文があり、外国のものでは、明末清初の耶蘇会士作製の漢文世界地図のうち、A・シャル・フォン・ベルとM・ブノワのものについての海野一隆氏の、マルチン・ベハイムの地球儀についての織田武雄氏の、一六八七年のシベリア地図についての三上正利氏の論文がそれぞれある。

集落地理の論文では、細井淳一氏が静岡市近郊村の近世—明治初期の土地利用形態について、堀川侃氏が昭和四十二年の名古屋市の転出入人口について、村松繁樹氏が第二次大戦後の礮波散村の耕地整理等を中心とした近代化について、島之夫氏が西欧諸国の家屋について、小林博氏が滋賀県における京都の影響圏について、西村陸男氏がクリスタラーのエリア構造に関する諸批判について、それぞれ執筆している。

経済地理の論文では、岡本啓志氏が山梨県のリンゴ栽培と発展と現況について、大島襄二氏が日本の真珠養殖業について、土井仙吉氏が西日本主要漁港の勢力変動について、蔽内芳彦氏が東南アジア諸国漁業が抱えている共通の問題について、内田秀雄氏が金沢・高岡・長浜仏壇工業の特色と発